

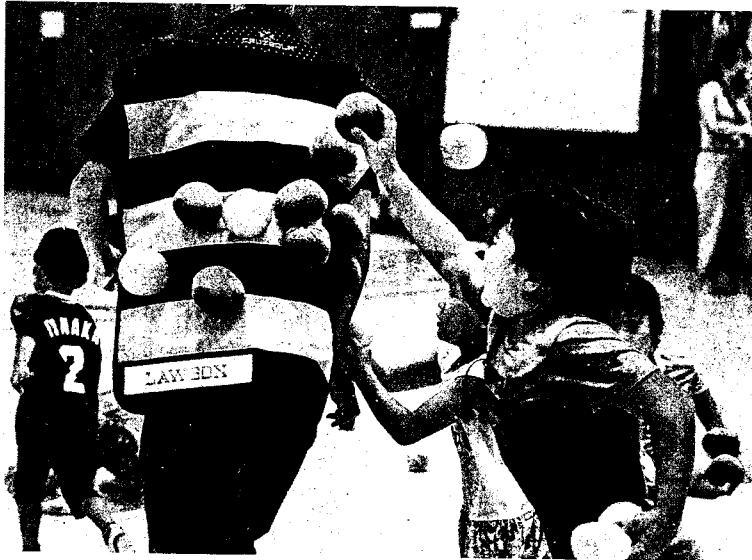
特別支援教育

知的障害ある子 球技楽しむ

鬼ごっこ×玉入れ ポンチョ着た先生を的に

東京都立田無特別支援学校の体育

中々重度の知的障害がある児童・生徒にも球技をより楽しんでもらおうと、東京都立田無特別支援学校の鈴木敏成さん(指導教諭)は、生徒が投げたボールが当たるくっつくポンチョを着てくっついたボールの数を競う「ペガボール」を保健体育の授業で実施している。鬼ごっこと玉入れを組み合わせたような競技で、運動能力がさまざまな生徒が一緒に活動できる。本年度も高等部1年生の授業で実施する予定だ。



大人が着たポンチョにボールをくっつけていく子どもたち。田無特別支援学校の他、「ペガボール」は、さまざまな場面に広がっている

この競技は平成26年度の人の日本ペガボール協会福岡県障害者スポーツ活性(東京・千代田区)が普及化事業により生まれた。「ペガボール」は、スペイン語「競技としてのペガボールで、くっつける」という意味。面ファスナーを活用し、標的となる人が着用したポンチョにうまくボールが当たるとくっつく。

鬼ごっこは、鬼ごっこのように、標的が動き回る。前任教では、特に障害が重い子を担当したことがあった。この子は、ペガボール用のボールをひとたびつかむと握りしめてしまっただけで、投げるとは至らないう。投げるとは至らないう。投げるとは至らないう。投げるとは至らないう。

実態に合わせて教具使用

鈴木さんは、前任校の校長が、障害がある生徒のスキルという。運動量の多さ等部の生徒の保健体育に關して、「球技の多様な経験中に拡大。あらゆるスポーツに感染症対策が求められるようになり、ペガボールへの関心も高まった。

鈴木さんは、前任校の校長が、障害がある生徒のスキルという。運動量の多さ等部の生徒の保健体育に關して、「球技の多様な経験中に拡大。あらゆるスポーツに感染症対策が求められるようになり、ペガボールへの関心も高まった。

鈴木さんは、前任校の校長が、障害がある生徒のスキルという。運動量の多さ等部の生徒の保健体育に關して、「球技の多様な経験中に拡大。あらゆるスポーツに感染症対策が求められるようになり、ペガボールへの関心も高まった。

鈴木さんは、前任校の校長が、障害がある生徒のスキルという。運動量の多さ等部の生徒の保健体育に關して、「球技の多様な経験中に拡大。あらゆるスポーツに感染症対策が求められるようになり、ペガボールへの関心も高まった。

鈴木さんは、前任校の校長が、障害がある生徒のスキルという。運動量の多さ等部の生徒の保健体育に關して、「球技の多様な経験中に拡大。あらゆるスポーツに感染症対策が求められるようになり、ペガボールへの関心も高まった。